

史の時代から個の時代へ : 紀元前4世紀ギリシア が意味するもの

著者	秋山 学
雑誌名	筑波大学地域研究
巻	41
ページ	31-50
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/0015991

史の時代から個の時代へ —紀元前4世紀ギリシアが意味するもの—

From the Era of History to the Era of Individuals: Meaning of the Greek World in the 4th Century B.C.

秋山 学
AKIYAMA Manabu

Abstract

As regards the history of the Ancient Greek World in the 5th century B.C., we have historical works of Herodotus and Thucydides. However, we have less interest as a rule in its history of the 4th century B.C., although we have the *Hellenica* of Xenophon, who records the events up to the battle of Mantinea in 362 B.C., and the *Anabasis of Alexander*, who was enthroned in 336 B.C., written by Arrianus. Unfortunately, there is no chronicle record of the Greek World from 361 to 336 B.C. except for the *Bibliotheca* of Diodorus Siculus in the era of Republic Rome. Especially, concerning the history from 361 B.C. to the 351 B.C. when Demosthenes gave the first speech against Phillip II, there is no historical document written in a systematic form but the work of Diodorus as a secondary material. Diodorus begins his 15th book of *Bibliotheca*, on the one hand, from 384 B.C., when the Corinthian War ended with the conclusion of the peace treaty of Antalcidas. He begins the next 16th book, on the other hand, from 359 B.C., when Phillip II was enthroned, and begins the 17th book from 336 B.C., when Alexander was enthroned. Therefore, we might say that there can be found a difference in Diodorus' historiography between that of his 15th book and of 16th & 17th book, because from the enthronement of Phillip on, he begins writing history in the frame of events of the important figures: Phillip and Alexander. We might say that the historiography based on history itself changed here to the one based on individuals. However, when we fix our eyes on the events of the Social War (357 - 355 B.C.), we will be already aware that some specific figures appear on the stage with their own activities: e.g., Iphicrates, Timotheus, Menexenus, Chares. Among them, Chares especially makes a special impression on us when he accuses his comrade admirals of treason and graft after the Social War which ended with his own defeat in the sea-battle at Embata (355). Chares' temporary financial collaborator Artabazos, one of the Persian satraps and a rebel against Artaxerxes III with the aid of Chares and then of Pammenes, impresses us too. So, we might conclude that the lack of chronical records in the middle of the 4th century B.C. testifies to the groping for a new method of historiography suitable for describing new active people as individuals.

Key Words : *Hellenica* of Xenophon, *Bibliotheca* of Diodorus Siculus, Social War, Chares, Artabazos

キーワード：クセノフォン『ヘレニカ』、ディオドロス『歴史文庫』、同盟市戦役、カレス、アルタバゾス

1. 序

古代ギリシアの史学史を顧みるとき、紀元前5世紀の歴史については、ペルシア戦争（前500-449）の記録を遺したと一般に位置づけられるヘロドトス（前484-425；異論については秋山2010）、ペロポネソス戦争（前431-404）の戦史を著したトゥキュディデス（前460-400）の2大史家の輝きがまぶしい。これに対し、その後が続く前4世紀の歴史に関しては、クセノフォン（前430-355）による『ヘレニカ』（「ギリシア史」）が362年までの通史として遺されている。『ヘレニカ』の邦訳（根本1999）が公刊されたことで、ペロポネソス戦争末期から紀元前4世紀にかけてのギリシア史に関しては、大幅に一般の認識が高められ得たと言えるだろう。もっとも、マケドニア王としての二人の人物、すなわちフィリッポスII世、それにアレクサンドロス大王が登場するまでの期間については、ギリシア世界において多くの事件が起きたにもかかわらず、歴史的認識は依然として高くはないと言ってよい。その大きな理由として、フィリッポスII世に焦点を合わせた通史書には、ポンペイウス・トログスが著しユニアヌス・ユスティヌスによる抄録の遺る『フィリッポス史』があるほか、アレクサンドロスの事績を記した史書としては、大王の即位（336）以降の行動を詳細に記録したアイリアノスの『アレクサンドロス大王東征記』（大牟田2001）が遺るという状況と、『ヘレニカ』 擱筆以降フィリッポス即位（359）までの時代については、通史の一次史料すら見当たらないという状況とが対照的であるという点を指摘できよう。もっとも『フィリッポス史』に関しては、ユスティヌスが抄録を著した時点でフィリッポス以前の部分に付加が及ぼされており（フィリッポスは第7巻より本格的に登場することになる）、「フィリッポス以降」という印象は薄められている。結局、前4世紀の重要性は、総じてマケドニア王国の歴史的 중요度に照らして評価されているに過ぎない、ということだけは言えるであろう。

ところで、トゥキュディデスが『戦史』の筆を置くのは411年秋の段階であり、それ以降の出来事について、上述のクセノフォンが時を隔てることなく書き継いでいる。ただその一方で、アリストテレス（前384-322）による『アテナイ人の国制』の前半部が、非常に簡にして要を得た国制変遷史となっていて、これが401/0年に起きた民主政治の復活までを辿っている。したがって現実には

- (1) 400年以降、362年までのギリシア史
- (2) 362年以降、336年までのギリシア史

について、われわれは情報に乏しいという状況にある。ただ上述のように、(1)についてはクセノフォンの『ヘレニカ』を頼りにし得るのに対し、(2)には同時代の通史書が見当たらない。

そこでわれわれが通常ひも解くのが、①まず、前4世紀に群れを成して登場する弁論家たちの遺した言説であり、②次には、ローマ時代に文学ジャンルとして確立した伝記的史料であり、③最後には、同時代史料ではないものの、年代記的史料として後世広く読まれた、ローマ時代のギリシア史家たちの著作である。そして紀元前4世紀のギリシア世界については、ローマ共和制期の人・ディオドロス・シクルス（前80-20）の史書『歴史文庫』が遺されている。

もっともこのうち、(2)の伝記史料について、一般的にはギリシアの英雄とローマの英雄を対比したプルタルコス(後50-120)の『対比列伝』が著名である。ただ、この著作に英雄として取り上げられている人物とそうでない人物とでは、やはり史料としての重みが異なる。ローマ時代の伝記的史料としては、コルネリウス・ネポスの『英雄伝』も思い浮かぶ。こちらはプルタルコスが取り上げていない将軍たちを扱っていて有用であるが、ラテン語史料でもあり、誤謬と思われる部分も少なくない。時間的隔世による誤りについてはいかんともしがたく、上述したディオドロスの史書を全面的に信頼しえないのもここに一因がある。

一方、(1)の弁論家たちによる演説についてであるが、本稿で取り上げる時代に関しては、弁論家デモステネス(前384-322)が本格的にフィリッポス攻撃の弁を揮うのが351年のことであり、デモステネス関係の資料から様々な史実が明らかになる。したがってこの時代を別扱いとすれば、上の(2)はさらに細分化され得て、

(2a) 362年以降、352年までのギリシア史

(2b) 351年以降、336年までのギリシア史

に分割できよう。そしてこのうち(2a)について、われわれの認識は特に薄いと言えるであろう。

II. 紀元前4世紀・アレクサンドロス即位(336)までの重要事項12件

ではまず、前4世紀における重要な歴史事項を12件挙げてみることにしよう。これはあくまでも筆者の主観的な判断によるものであり、また399年ソクラテスの刑死は外してある(以下本稿で右片カッコ付きの数字は、下表における数字を承けるものである)。

- 1) コリントス戦争(395-386)
- 2) 大王の和約〔アンタルキダスの和約、普遍平和条約〕(386)
- 3) 第2次アテナイ海上同盟の成立(377)
- 4) ボイオティア戦争(379-362)
- 5) レウクトラの戦い(371)
- 6) マンティネイアの戦い(362)
- 7) 同盟市戦役(357-355)
- 8) 第3次神聖戦争(356-346)
- 9) フィロクラテスの和約(346)
- 10) ヘラス同盟〔反マケドニア同盟〕締結(340)
- 11) カイロネイアの戦い(338)
- 12) コリントス同盟締結(337)

III. クセノフォン『ヘレニカ』からの出発

まず、前362年までの通史として有効なクセノフォン『ヘレニカ』の概観から始めよう。

『ヘレニカ』（ギリシア史；全7巻）は、トゥキディデスの『戦史』第8巻（109節）が前411年秋の記述をもって中断され未完成に終わっているという点を受け、「その後」で始まる（前411年秋～）。ロエブ古典叢書ではクセノフォンの著作集のうち、この『ヘレニカ』が第1・2巻を占め、全7巻は順に、①前411-406年、②前406-401年、③前401-395年、④前395-389年、⑤前389-375年、⑥前375-370年、⑦前369-362年 の事件を収めている。

以下、前5世紀に属す事項も併せて、『ヘレニカ』中の重要な歴史事項を挙げてみたい。

第1巻第6章. 406年：アルギヌサイの海戦。

第2巻第1章. 405年：アイゴス・ポタモイの海戦。

第2巻第3章. 404年アテナイが無条件降伏。アテナイに30人政権が成立、その失墜まで。

第3巻第3章. スパルタ王家の歴史。

第4巻第2章. 395年：コリントス戦争（～386）。

第4巻第3章（16節）. 394年：コロネイアの戦いでスパルタ（アゲシラオス王）が勝利。この戦闘については、著者クセノフォン自身が参戦し、かつ敬愛するアゲシラオス王が勝利した戦いでもあるために著者の筆致が高まっているとも思われ、上掲の「重要事項」には数えていない。

第5巻第1章. 386年：大王の和約（アンタルキダスの和約）。

第5巻第4章（13節）. 379年：テバイ、スパルタと戦争開始（ボイオティア戦争の勃発）。

第6巻第4章. 371年：レウクトラの戦。エパメイノンダスの斜線陣により、テバイがスパルタに勝利。スパルタと近い関係にあったアテナイは大いに落胆する。

第7巻第5章. 362年：マンティネイアの戦。エパメイノンダスが戦死し、同時にクセノフォンの長子グリュロスも戦死する。これによりテバイの覇権は凋落し、一連のボイオティア戦争が終結する。

IV. 時代の概観（1）

1) コリントス戦争

コリントス、アテナイ、テバイ、アルゴスがアケメネス朝ペルシアの援助を受け、同盟してスパルタと戦った戦争。ペルシアはこれら同盟国に資金を送り、スパルタはペルシアの狙い通り、小アジアから軍を撤収する。スパルタはネメア、コロネイアで勝利を収めたが、同盟軍はコリントス地峡部を死守し、またアテナイ人コノンがペルシア海軍の提督としてクニドス沖の海戦でスパルタ海軍を破る（394年）。スパルタの海上権は失われ、アテナイは再び強国の地位を回復する。しかし、かつて5世紀に繁栄したアテナイ海上帝国が復活することを恐れたペルシアはスパルタと結び、386年に講和条約が結ばれた。これが「大王の和約」である。小アジアのギリシア

人がペルシア王に服属することが決議される。

2) 「大王の和約」(386)

スパルタの提督にして政治家アンタルキダスがペルシア王の力を借りて成立させた、アケメネス朝ペルシアとギリシア諸都市の間の和約。この条約によりコリントス戦争が終結し、小アジアのギリシア人諸都市はペルシアの支配下に入る。クセノフォンが『ヘレニカ』の中で記している重要な歴史事項の一つに数えられる。

3) 第2次アテナイ海上同盟の締結(377)

アテナイは、「大王の和約」によりペルシアと通じたスパルタが支配を強めることに異を唱え、377年、第2次アテナイ海上同盟を締結する(「第1次」は477年のデロス同盟)。この第2次海上同盟は、アテナイ提督のコノン(後述)によるクニドスでの海戦(395/4)ほかにおける華々しい活躍からの連続線上に置かれる。締結に先立ち、テバイが覇権を求めてスパルタに宣戦し(ボイオティア戦争; 後述)、結局スパルタの威信は、レウクトラの戦い(371)において失墜する。

この「第2次海上同盟の締結」については、古来、『ヘレニカ』に明確な形での記述が見当たらないという批判があり、これがクセノフォンの史家としての資質を疑問視する傾向にもつながっている。この同盟の締結は前377年のこととされ(伊藤2004: 284)、またハモンドの『前322年までのギリシア史』(31986: 485)によれば、これは378年から377年にかけての冬のこととされる。後出のディオドロス第15巻にも、その第28章から30章にかけて、この条約に関する詳述が認められる。『ヘレニカ』では、前377年の出来事は巻5の47章から57章あたりに載りそうであるが、これに相当する記事は確かに見当たらない。ただ『ヘレニカ』の注釈者アンダーヒルによれば(Underhill 1906: 208, 215)、『ヘレニカ』第5巻4章60-61節に載る「アテナイ側よりもはるかに多数の艦船」(これは376年に関する記述)という表現が、その前年にアテナイ側に同盟関係が成立していることを前提とするほか、同じく4章34節に載る「アテナイ人はボイオティア人を全力で支援し始めた」(これは378年に関する記述)との記載が、すでに377年の前年よりアテナイ側の実質的活動が始まっていたことを表すとされ、問題視するには当たらないともされる。

4) ボイオティア戦争(379-362)

「ボイオティア」とは、実質的にテバイを指す。したがって「ボイオティア戦争」とは、テバイが、スパルタを抑えてギリシアの覇権を獲得し、その後衰退する一連の動きを意味する。実際には「スパルタの覇権からのテバイの解放(379、スパルタの駐屯軍が退去)、レウクトラの戦い(371、エパメイノンダスがスパルタ軍を破る)の後のテバイの覇権確立、マンティネイアの戦い(362、エパメイノンダスの戦死とテバイ覇権の閉幕)に至る一連の戦争」(合阪1998: 12-13)がこの表現で表され、5) レウクトラの戦い、および6) マンティネイアの戦いは、この「ボイオティア戦争」の連関の中で捉えることができる。

V. 『ヘレニカ』の限界とディオドロス・シクルスの必要性

クセノフォンの『ヘレニカ』は、前362年マンティネイアの戦いにおけるテバイの名将・エバメイノンダスの戦死までを収める。したがって、『ヘレニカ』だけでは上記重要事項12件のうち6)まで、すなわち半数しかカバーできない。あとの半数、すなわち7)以下について、史料的状态はどのようになっているのだろうか。

年代記的史料の途絶する前362年以降の期間については、さしあたりディオドロスの第15巻を参照する以外にない。ディオドロスの第15巻は前386年から始まる。ディオドロスは自らの記述に当たり、当該年におけるアテナイのアルコンおよびローマのコンスルの名を記すとともに、4年ごとのオリュンピア紀年を付記し、正確を期している。一方第16巻は全体で95節あり、前359年におけるフィリッポス二世の即位から、336年におけるその死までを収める。ロエブ古典叢書では、ディオドロスの第7分冊と第8分冊とに二分されていて、前者には第1節から第65節まで(前359年から346/345年まで)、後者には第66節から第95節まで(前345/344年から336/5年まで)が収められている。この分割は、第3次神聖戦争の終結(346)を基準にしている。

7)の「同盟市戦役」は357年から355年にかけての出来事である。上述の「第2次アテナイ海上同盟」は、377年から発効したものの、事実上この「同盟市戦役」、およびそれに伴うアテナイの敗北・撤退により、事実上瓦解したと考えてよい。7)については後述する。

VI. ディオドロス『歴史文庫』第15巻の構成

さて、ディオドロスは第14巻の末尾において、次のように記している。

「歴史叙述家のカッリステネスは、ギリシア人と、ペルシア人の王であるアルタクセルクセスとの間に、この年(386年)に成立した和平を起点にして歴史を記述し始めている。彼は30年に及ぶ期間を10巻に分けて記し、その叙述の最終巻を、フォキス人のフィロメロスによってデルフォイの聖域が占拠された時点で終えている。だがわれわれとしては、ギリシア人とアルタクセルクセスとの間に和平が成立し、ガリア人によりローマが危機に陥った時点でまで至ったので、この巻の冒頭における約束に従い、これをもってこの巻の終わりとしたい」(14,117,8-9)。

ディオドロスが言う「フォキス人のフィロメロスによってデルフォイの聖域が占拠された時」とは、第3次神聖戦争の開始を意味し、これは356年の事件である。ディオドロス自身はこの件について、第16巻の23章に記す。もっともディオドロスは、この第14巻の結びを386年に置き、コリントス戦争の終結をもたらす「大王の平和」の締結の時点に一致させている。以下、ディオドロス各巻の冒頭に載るギリシア語梗概を訳出し、まず第15巻の内容を顧みよう。

1. ペルシア人が、キュプロス島のエウアゴラスに宣戦した次第 (2-4, 8-9 ; 386/385)。
2. スパルタ人が、共通の合意に反してマンティネイア人を祖国から移住させた次第 (5, 12)。
3. 僭主ディオニュシオスの詩業について (6-7)。
4. ティリバズス (ペルシアの総督) の捕縛と釈放について (8, 10-11)。
5. グロースの死とオロンテスの有罪宣告について (11, 18)。
6. アミュンタスとスパルタ人がオリュントス人に宣戦した次第 (19, 21-23)。
7. スパルタ人がカドメイアを占領した次第 (20 ; 382/381)。
8. スパルタ人が、ギリシア諸都市を、協約に反して奴隷化した次第 (23 ; 380/379)。
9. アドリア海でのファロス島への植民 (13)。
10. デイオニュシオスによるテュレニアへの出征と、神殿の略奪 (14 ; 384)。
11. デイオニュシオスによるカルタゴへの出征と、その勝利と敗戦 (15-17 ; 383)。
12. テバイ人がカドメイアを奪還した次第 (25-27 ; 378/377)。
13. カルタゴ人が疫病に倒れた際に危機に陥った次第 (24 ; 379/378)。
14. ボイオティア戦争と、その際に起こった出来事 (28-35 ; 377/376)。
15. トリバッロリア人による、アブデラへの出征 (36 ; 376/375)。
16. ペルシア人によるエジプト出征 (41-43 ; 374/373)。
17. テバイ人がスパルタ人に対し、レウクトラの戦いにおいて輝かしい戦いで勝利を収め、全ギリシアの覇権を要求した次第 (50-56 ; 371/370)。
18. テバイ人によるスパルタ侵攻の際の事績 (62-66 [369/368], 69, 75 [367/366], 82-88随所 [363/362])。
19. イフィクラテスによる戦法と、彼によって発明された兵法 (44)。
20. スパルタ人によるコルクュラ出征 (46-47)。
21. スパルタを襲った地震と洪水、そして天に現れた炎について (48-50 ; 373/372, 372/371)。
22. アルゴス人の許で「スキュタリスモス」と呼ばれる大量の虐殺が起きた次第 (57-58 ; 370/369)。
23. フェライ人の僭主イアソンと彼の後継者たちについて (57, 60, 80 [364/363], 95 [361/360])。
24. テバイ人によるメッセネへの集住 (66-67)。
25. ボイオティア人によるテッサリアへの出征 (67)。

ここまでで、第15巻のギリシア語梗概は終わっている。ただ末尾のあたりの章番号がよく表すように、同巻後半での梗概は粗雑としか言いようがない。そこで以下、ベッカー・ディンドルフのテキストをフォゲルが改訂したトイプナー版のディオドロス第3分冊冒頭に載るラテン語要綱より、前363年以降に当たる第82章から第95章について訳出することにしよう。

- 82 (章番号を表す; 363年), ピサ人とエレア人の間に争いが起き、アルカディア人は二分される。一方の側をテゲア人が指揮し、彼らの味方をしてボイオティア〔テバイ〕人がエパメイノンダスの指揮のもとに戦う。もう一方の側をマンティネイア人が率い、彼らの同盟者となったのはアテナイ人とスパルタ人である。スパルタ人はアルカディアに向け、またエパメイノンダスがスパルタの都に向け侵攻を行う。
83. エパメイノンダスによる極めて激しい攻撃に抗してスパルタ人は果敢に防衛を行う。
84. エパメイノンダスは、急襲によってマンティネイアを制圧せんとする間に、アテナイ人に攻撃を仕掛ける。ここへ急遽スパルタ人とマンティネイア人が到着する。双方の側の軍勢が記される。
85. マンティネイアの戦いが切れて落とされる。形成された戦列の記述。戦いの端緒となったのは騎兵戦である。ボイオティア人とテッサリア人の騎兵が勝利を収める。
86. マンティネイアでの歩兵戦は、長らく勝敗が決着を見なかった。ついに戦闘を短縮するためにエパメイノンダス自ら出陣する。これによりスパルタ軍の戦列が撤収する。
87. エパメイノンダスが重傷を負い、テバイ人が勝利を収める。死に臨んでのエパメイノンダスの言葉。
88. エパメイノンダスへの讃辞。

このようにディオドロスの記述では、第15巻87章1節にテバイの名将エパメイノンダスの戦死が語られ、同巻88章すべてがエパメイノンダスへの讃辞に充てられている。ディオドロスは「優れた人物」として、テバイの人ペロピダス、アテナイ人のティモテオスとコノン、カブリアスとイフィクラテス、時代は遡るがスパルタ人のアゲシラオスを挙げる。彼の言葉に聞こう。

「さらに遡るならば、アテナイのソロン、テミストクレス、ミルティアデス、キモンとミュロニデス、ペリクレスその他があり、さらにシケリアにはディノメノスの子ゲロンその他がいる。だがこれらの人々の徳をエパメイノンダスの戦術と荣誉に比較してみるならば、エパメイノンダスが備えていた徳がはるかに優れていたということが見出されるだろう……」(15,88,2-4)。

ただしディオドロスは、歴史記述の先駆者たちクセノフォン、アナクシメネス、フィリストゥス―がいずれも、このマンティネイアの戦におけるエパメイノンダスの死をもって各々の記述を終えていることを、次の第15巻89章3節の全体を割いて記している。したがって、クセノフォンに代えてディオドロスを参照すべきは第15巻90章以降(90-95; 361年以降)となる。

89. ギリシア人の間に、和平と同盟が結ばれる。スパルタ人は、メッセネ人を理由にこの同盟から離脱する。クセノフォンとアナクシメネス、それにフィリストゥスはこの年をもって歴史記述を終えている。
- 90 (362/1年), アシアに住むギリシア人たちは、アルタクセルクセスに対して大きな戦争を仕掛ける。総督たち、それにエジプト王のタクスは反旗を翻す。
91. ペルシア人の王から離反した人々によって、オロンテスが指導者に選ばれたが、オロン

- テスは彼らを裏切り、王に引き渡す。同様にミトロバルザネスは、王から離反したダタメスを裏切るが、ミトロバルザネスは、自身の姦計によって捕らえられ殺害される。
92. 反逆者であったレオミトレスは、反逆者たちを差し出したため王に感謝される。タコス
は傭兵隊の指揮官にアゲシラオスを、艦隊の指揮官にカブリアスを据える。カブリア
スはフェニキア人に対して出征した際、エジプト方面を任せてあった将軍により裏切
られている。それゆえカブリアスはアルタクセルクセスの許に逃れ、このアルタクセ
ルクセスによって、カブリアスはエジプト人に対する戦争遂行の指揮官に任じられる。
93. アルタクセルクセスが死去し、オコスが襲位する。タコスはアゲシラオスの武勇と勝
利によってエジプトを奪還する。アゲシラオスは祖国に帰還し没する。
94. 以前、メガロポリスに集められていたアルカディア人たちは、和平が成立したために
以前の祖国に去るが、テバイ人の長パンメネスによってメガロポリスに戻るよう強い
られる。アタナスはディオンの事績をここから記述し始める。
- 95 (361/0年). フェライの人アレクサンドロスがキュクラデス人を攻撃し、ペパレトスを占
領する。レオステネスは、包囲された人々のためにアテナイ人によって援助に派遣さ
れたものの、活動が劣悪だったため死刑に処せられる。彼の代わりに据えられたカレ
スが、多くの悪事を為す。ディオニュソドロスとアナクシスは、諸事件をこの年まで
記述している。

この第15巻の末尾でディオドロスは次のように記している。「歴史記述家ののうち、ポイオ
ティア人のディオニュソドロスとアナクシスは、ギリシア人に関する歴史記述をこの年 (361/0
年) までで終えている。しかるにわたくしは、王フィリッポスの事績を詳述するため、この巻
の冒頭に記した序文に従い、ここまでに終えることにしよう。フィリッポスによって行われた
王権の奪取に始まり、われわれはこの王の事績すべてを、その死にいたるまで詳述する。その
間に世界において知られている地域で行われた他の出来事をも、そこに盛り込んだのである」
(15,95,4)。

末尾の部分は、言うまでもなく次巻すなわち第16巻の内容を表現したものである。

VII. ディオドロス『歴史文庫』第16巻の構成

では、次にディオドロス第16巻の内容を、同じくギリシア語梗概からまとめておこう。

1. アミュンタスの子フィリッポスが、マケドニアの王位を得た次第 (1-2 ; 360/359)。
2. フィリッポスが、王座をめぐる対抗したアルガイオスに勝った次第 (3)。
3. 彼がイリュリア人・パイオン人を降した後、父祖伝来の支配圏を獲得した次第 (4 ;
359/8)。
4. 小ディオニュシオスの男気のなさ、ディオンの逃亡について (5-6 ; 6より358/7)。

5. シケリアにおけるタウロメニオンの創設について (7,1)。
6. エウボイアをめぐり、また同盟市戦役の際に起こった出来事 (7,2-7,4)。
7. フィリッポスによるアンフィポリスの占領とその征服 (8,1-8,2)。
8. フィリッポスがピュドナの人々を奴隷とし、金貨を作らせた次第 (8,3-8,7)。
9. ディオンがシラクサ人を解放し、ディオニュシオスを破った次第 (9-15 ; 14まで 357/6, 15より356/5)。
10. ディオンが祖国から追放されながら、再びシラクサを獲得した次第 (16-20)。
11. 同盟市戦役の終焉 (21-22,2)。
12. フィリッポスに抗しての3人の王の共闘 (22,3)。
13. フォキスのフィロメロスがデルフォイを制圧、その神託を掌握し、神聖戦争を煽った次第 (23-25 ; 355/4)。
14. 神託の発見譚 (26)。
15. フィロメロスの敗戦と死 (27-31 ; 28より354/3)。
16. オノマルコスの支配圏掌握と戦争への準備 (32-33 ; 353/2)。
17. ボイオティア人がアルタバゾスを援け、大王の総督たちに勝った次第 (34,1-2)。
18. アテナイ人がケルソネソスを攻略し植民市化した次第 (34,3-4)。
19. フィリッポスがメトネを攻略し略奪した次第 (34,4-5)。
20. フィリッポスがフォキス人に勝利を収め、彼らをテッサリアから追放した次第 (35,1)。
21. フォキス人のオノマルコスが二つの戦いにおいてフィリッポスに勝利を収め、最大の危険にまで追い込んだ次第 (35,2)。
22. オノマルコスがボイオティア人に勝利を収め、コロネイアを占領した次第 (35,3)。
23. オノマルコスが、フィリッポスおよびテッサリア人に対し、テッサリアに陣を張ったものの敗れた次第。
24. オノマルコスが磔刑に処せられ、他の者どもは神聖冒涇者として海に投げ入れられた次第 (35,6)。
25. ファウッロスが主権を継承し、多くの金銀の奉納物で貨幣を鑄造した次第 (36,1)。
26. 彼が、傭兵の給金を上納したのち、多くの傭兵を集めた次第 (36)。
27. フォキス人の状況が卑しめられていた際に、彼がこれを是正した次第 (37,1 ; 352/1)。
28. 彼が、金銭で諸都市とその主導者たちを腐敗させ、多くの同盟者を得た次第 (37,2-3)。
29. フェライの僭主たちが、フィリッポスにフェライを引き渡し、フォキスの同盟市となった次第 (37,3)。
30. オルコメノスをめぐってのフォキス人のボイオティア人との戦い、ならびにフォキス人の敗北 (37,4-5)。
31. ケフィソス、コロネイア近郊での彼らによる戦いとボイオティア人の勝利 (37,5-6)。
32. ファウッロスがロクリスに出征し、多くの諸都市を手中に収めた次第 (38,1-5)。
33. ファウッロスが悪性の疫病に倒れ、その生涯を苦悩のうちに終えた次第 (38,6)。

34. ファライコスが指揮権を継承し、相応しくない仕方で戦争を遂行し、追放された次第 (38,6 ; 59)。
35. スパルタの人々が内乱に陥った次第 (39)。
36. オコスと呼ばれるアルタクセルクセスが、エジプト、フェニキア、キュプロスを獲得した次第 (40-52,8 ; 351/0- ; 46より350/49 ; 52より349/48)。
37. フィリッポスがカルキディケの諸都市を自らの側につけ、その最も重要な都市を略奪した次第 (52,9-55 ; 53より348/47)。
38. 持ち去られた聖なる財産の探索と、奪取者たちの処罰 (56-57 ; 347/46)。
39. アポロンの神殿に逃れたフォキス人500名が、予想に反して全員火刑に処せられた次第 (58)。
40. フォキス戦争が終結した次第 (59-60 ; 346/5)。
41. フォキス人とともに神殿冒険に加わった者たちが、すべて何らかの神力的な力によって処罰せられた次第 (61-64)。
42. ティモレオンのシケリアへの航行と、死に至るまでの彼の行動 (65-90随所 ; 66より345/4 ; 69より344/3 ; 70より343/2 ; 72より342/1 ; 74より341/0 ; 77より340/39 ; 82より339/8 ; 84より338/7 ; 89より337/6)。
43. フィリッポスによるペリントゥスとビュザンティオンの攻囲 (74-77 ; 341/0 ; 77より340/39)。
44. カイロネイアにおけるフィリッポスのアテナイ人に対する布陣と、アテナイ軍の敗戦 (84-88 ; 338/7)。
45. ギリシア人が、フィリッポスを最高司令官に選出した次第 (89 ; 337/6)。
46. フィリッポスが、アジアに渡ろうとしたところを殺害された次第 (91-95 ; 336/5)。

こうして、ディオドロス第16巻の範囲はつぎのようにまとめられる。

フィリッポスの即位 (359) ; 同盟市戦役の勃発 (357) ; 第2次アテナイ海上同盟の事実上の解体 (355) ; 第3次神聖戦争 (356 - 346) ; フィロクラテスの和約 (346) ; カイロネイアの戦い (338) ; コリントス同盟の成立 (337) ; フィリッポスの暗殺 (336)。

この第16巻の末尾で、ディオドロスは次のように述べている。

「さてわれわれは、フィリッポスの死の時点にまで及んだ。巻の冒頭に述べた序言に従い、この巻をここで締めくくりにしよう。次巻の冒頭は、アレクサンドロスによる王位継承とし、彼の事績を一巻のうちにすべて盛り込むことを試みたい」 (16,95,5)。

ディオドロスは、このように、次の第17巻の開始をアレクサンドロスの即位 (336) に合わせたと明言している。こうしてローマ人のディオドロスは、歴史記述の枠組みを、すでにフィリッポスの代 (第16巻) から、個人による襲位の年に定めることにしているのである。

ここでフィリッポスの活動を年譜風にたどっておくことにしよう (合阪1998 : 143)。

368-365テバイに人質となる。357前王ペルディッカス三世がイリュリア人の攻撃により戦

死、フィリッポスが即位する。即位後、イリュリア、パイオニア人を制圧し、アンフィポリスを征服、357/356ピュドナを占領、356ポテイダイアを占領、354メトネ占領、352テッサリアの連合軍を率いてオノマルコス指揮下のフォキス軍を破る。350スタゲイラ、349/348オリュントスを破壊、346フィロクラテスの和約（ペッラでの交渉）。同年、フォキスとの戦争を再開して勝利、第3次神聖戦争を終結。以降、デルフォイの祭祀連盟を指揮。342トラキアを属州化。340アテナイはヘラス同盟を結成して対抗・宣戦（フィロクラテスの和約の破棄）。338カイロネイアにおいてギリシア連合軍は敗北。337スパルタを除くギリシア諸ポリスはマケドニアの下にコリントス同盟を結成、同総会はペルシアへの宣戦を決議。336春開戦、同年夏、アイガイで暗殺される。

VIII. 時代の概観（2）

8）第3次神聖戦争（356－346；上記II.の表を参照）

ディオドロスでは第16巻の23章より「第3次神聖戦争」の次第が語られる。上記の梗概におけるフィロメロス、オノマルコス、ファウッロス、ファライコスといった人物が、この第3次神聖戦争の指揮官であった。

この第3次神聖戦争と呼ばれる戦争は、デルフォイの祭祀連盟（アンフィクチオニア）をめぐる、フォキス（スパルタと結ぶ）とロクリスの戦争である（合阪1998：13）。フォキスのオノマルコスがテッサリアに触手を伸ばし、戦争は一挙に拡大して、フィリッポスII世の介入を招いた。上掲した「フィリッポスの事績」では、352年における、テッサリアの連合軍を率いてのオノマルコス指揮下のフォキス軍撃破以降が「第3次神聖戦争」関連の事項である。この「第3次神聖戦争」の終結協約が「9）フィロクラテスの和約」（346）である。

こうしてフィリッポスII世の役割は、先に挙げた「12の重要事項」のうち、10）ヘラス同盟の締結（340）においてアテナイが反マケドニアの立場を鮮明にし、11）カイロネイアの戦い（338）において諸ポリス連合軍がフィリッポスの軍門に下ったことをも含め、大きくなる一方である。フィリッポスは遂に、337年における12）コリントス同盟の締結という形で、全ギリシアの総帥としての立場を極め、その直後に暗殺されて生涯を閉じることになる。

IX. デイオドロスの問題点

このように、クセノフォン『ヘレニカ』が途絶える前362年以降の歴史に関しては、ローマ時代の史家ディオドロスの助けを借りねばならない。ただ彼の史書は同時代史料ではない。そればかりではなく、第14巻から15巻への移行が、アンタルキダスの和約（386）によるコリントス戦争の終結を契機として行われているのに対し、第15巻から第16巻への移行は、359年に行われたフィリッポスII世によるマケドニア王への即位を基準に行われている。この点、次代のアレクサンドロスの場合と異なり、フィリッポスII世が即位当初より圧倒的な力でギリシア世界を席巻し

たとは必ずしも言えないため、この巻分割はやはり後代の眼によるものと言わざるを得ない。

これらを勘案するならば、フィリッポスが介入する8) 第3次神聖戦争については、確かにフィリッポスの側から歴史的に跡づけることに意味は見出せるだろう。ただちょうど『ヘレニカ』の末尾(362)から、フィリッポスによるオノマルコス撃破(352)、ないし先に触れたデモステネス関係資料の出現(351)までの約10年間は、フィリッポス側から跡づけることに意味はなく、かつ史料的にも限界が認められる、いわば「空白の期間」として浮かび上がってくるのではないだろうか。

この362/1年から352/351年までの約10年間のうちに、すっぱりと収まるのがいわゆる7)「同盟市戦役」である。史料上の制約があるため、近代古典古代学の金字塔であるパウリ・ヴィッソヴァ『古典古代学百科事典』(RE)の助けを借り、以下人物像の解明を中心に叙述を進めることにしたい。まずは、この『古典古代学百科事典』を駆使し、時代の概観から始めよう。

X. 時代の概観(3)

7) 同盟市戦役(357-355; 上記II.の表を参照)

前4世紀に入ると、ペルシアの援助でアテナイはその国力を著しく回復し、「大王の和約」のちもスパルタに対抗しうる有力ポリスとしての地位を保持していた。そして上述のように前377年、第2回アテナイ海上同盟を組織し、再発展の基礎を築いた。この同盟はかつてのデロス同盟とは異なり、加盟諸市に貢租を課したり、駐留軍を置いたり、アテナイ市民の不動産取得を認めさせたりしないという建て前であった(伊藤2004:284)。けれども、加盟諸市の自治尊重というこの原則は、前360年代におけるテバイの勢力増大とともに崩れ、アテナイの同盟支配が強化された。この傾向は、前350年代に入ると一層顕著となり、アテナイの支配圏が拡大される反面、加盟諸都市は、アテナイの将軍や商人たちの越権に不満を抱くようになった。こうして、カリアの君侯マウソロスの発議により、第2次海上同盟の加盟国の間に新たな連合(キオス、ロドス、ビザンティオン、後にはコス)が生まれ、「同盟市戦役」(前357-355)が勃発する。この戦役は①エンバタ〔キオス島の東側の本土〕の海戦でのアテナイの敗戦(356)、および②ペルシアによる仲介の脅威(355)により、交渉と和平へとつながる。その次第については後に述べるが、結局、アテナイの勢力と権威は衰退へと向かう。

XI. 個性ある人物たち

1. コノン(444-392)

さて上述のように、同盟市戦役についてはディオドロスしか実質的な史料がないため、正確な詳細理解のためには、近代における古典古代学の成果を参照せねばならない。したがってこれ以降は、主としてパウリ・ヴィッソヴァ『古典古代学百科事典』(略称RE)を参照しての叙述が中心となる。

アテナイの提督コノンは、まだ「同盟市戦役」の時代より以前の人物であるが、次に登場するティモテオスの父親として参照しておく必要がある。彼はすでにトゥキュディデス『戦史』7,31に登場し、アイゴスポタモイの海戦に参加している。さきに挙げた『ヘレニカ』の中では、彼は第1巻4章10節から第4巻8章16節まで登場する。後者において、コノンが投獄されたことが伝えられる。これはティリバズスによって捕らえられたため（ヘレニカ4, 8,16）、コノンは次いでペルシア王により投獄され、キュプロス島に没する。ネボス『偉人伝』では第9章に挙がる。

2. ティモテオス (411-354)

一方コノンの子のティモテオスは、トゥキュディデスにはまだ登場しない。トゥキュディデスの収録年代が411年の秋までであることを考えれば当然でもあろう。クセノフォンの『ヘレニカ』には、第5巻4章63節より66節まで、および第6巻2章2節から同第13節まで登場する。

このティモテオスは、アンタルキダスの和約（386）から同盟市戦役までの間、実質的にアテナイ海軍の最高司令官を務めた。彼はイソクラテスの弟子、プラトンの友人であり、5世紀の著作家と4世紀の著作家をつなぐ位置にある。イソクラテスの第15番弁論『財産交換論』101-139は、このティモテオスを弁護した著作である。デモステネス第61番（『恋について』）46には「ティモテオスはその若年時になした行動よりも、イソクラテスとともに行った事柄により、大きな名声と名誉にふさわしい人物となっていることを知るであろう」（廣川2005：38）とある。

このように、コノンの息子でイソクラテスの愛弟子であったティモテオスは、394-393年にはおそらく父と共に従軍したのであろう。378年に初めて重要な指揮官に任命され、375年には將軍として、コルキュラ、ケファレニア、アカルナニアを第2次アテナイ海上同盟に迎え入れることに成功し（コルキュラについてはBurtt 1980：182）、レウカス島の近郊アリュズビアにおいてスパルタ海軍を破った。その後しばらく不評を買ってアテナイを離れるが、367年には戻り、北・東エーゲ海において活躍し、アンフィポリスとオリュントスについては成功しなかったものの、サモス（365）、セストス、クリトテ、メトネ、トロネ、ピュドナ、ポテイダイアほかをかち取った。365年にサモス島を攻略した際には、1タラントンをイソクラテスに贈与したという（廣川2005：38）。

357年、彼はイフィクラテス、メネステウスおよびカレスと共にアテナイ海軍の司令官の立場にあったが、この年、キオス島民とその同盟国（いわゆる「キオス同盟」；「同盟市戦役」と呼ばれる際の「同盟」とは、この「キオス同盟」を意味する）の一員であったビュザンティオンへの制裁を意味する出征をめぐり、カレスと、アテナイ海軍の他の司令官たち、すなわちティモテオス、イフィクラテス、およびイフィクラテスの子メネステウスとの間に衝突があった。カレスは、彼らの中で合意されていた攻撃の計画を実行することに固執したが、他の者たちは嵐を理由に拒否、カレスは前355年、単独出撃してキオス同盟軍に敗れる（小池2002：197）。こうして援軍を得られずにカレスは敗れたが、アテナイに戻ると、彼は同僚らを裏切りと贈収賄を理由に告訴する。ティモテオスはこのような形で、カレスにより買収のかどで告訴されることになる。

裁判の場で、イフィクラテスは遠征の責任を負い、メネステウスは領収書と支出書をすべて提

出した。彼らは釈放されたが、ティモテオスは民会メンバーに知名度が高くなかったため、あるいはREによれば、彼には自らが務めを忠実に果たしたという意識があり、その不屈のプライドのうちに、陪審員たちに憐れみを請うことを拒んだ。こうしてティモテオスは、100タラントンのという莫大な罰金を科せられる。この裁判の年代については、ディオニュシオス・ハリカルナッソスの「デイナルコス論」13,668,2に「ディオティモスがアルコンの年」とあることから354年と推察されるのに対し、ディオドロスは356年とする。諸々の状況を勘案するとディオニュシオスの方に分があり、354年という年代が受け入れられている。また、イソクラテスが『アンティドシス』（財産交換論）で展開したティモテオスへの讃辞は、典型的な「脱線」の例とされている（Norlin 1982 : 240-241）。

なお根本氏によれば、ティモテオスは「娘婿の責任逃れの犠牲となり」（根本1999 : 63）とされるが、ディオドロス・シクルス16,21,4の注によれば、ティモテオスの義理の息子でイフィクラテスの子がメネステウスとされていて、このメネステウスが実際、ティモテオスの「娘婿」である（後述）。ただ「責任逃れ」とされることが、実際にどのような状況を指すのかについては判明しないように思われる。

こうしてイフィクラテスが放免となったのに対し、ティモテオスは100タラントンの罰金刑に処せられるもそれを払うことができず、エウボイアのカルキスに死去したと伝えられる。これは『アンティドシス』が記される前年、354年・57歳の頃のことであろう（Norlin 1982 : 258-259）。同作品が記されたのは前354-353年であったと推定されるためである（Norlin 1982 : 183）。

こう見てくると、コノンの子・ティモテオスの生涯の終焉は、同盟市戦役の終結にやや遅れるることとなる。イソクラテスは338年に没するが、それよりもかなり早い段階で、イソクラテスは自らの弟子ティモテオスに先立たれていることになる。なおティモテオスについては、プラトンの『第13書簡』（363a1）にもその名が現れる。

3. イフィクラテス

ティモテオスとは、その子どうしが婚姻関係を結ぶことになるイフィクラテスについて、ここで補完的に見ておこう。イフィクラテスはアテナイの将軍であり、やはりティモテオスという人物の息子で、ラムノスの出身である。彼はまず、海軍勤務において頭角を現した。コリントス戦争（395-386）において名声と栄誉を獲得したが、この戦争で彼は、コノンによって創設された傭兵部隊を指揮した。393年、レカイオンの戦闘に参戦し（ヘレニカ4,4,9；ディオドロス14,91,3）。392年にはペロポネソス半島の内奥深くへの探索行を企てて、フリウス、シキュオン、ステュンファロス、その他アルカディアにおけるスパルタの同盟市を攻撃した。390年5月には、コリントスの領内にあったスパルタの城塞を奪取したが、コリントスにおけるアルゴス側の立場の者たちと不和となり、アテナイに送還された。トラシュブロス（アテナイの政治指導者）が388年に没したのち、彼はヘレスポントスにおいてアテナイの兵力を指揮し、アビュドスにおいてアナクシビオス率いるスパルタ軍とアビュドス軍を撃ち、おそらくこの時キオスを獲得して、アビュドスとカルケドンを封鎖した。これはアンタルキダスが彼から制海権を奪い取るま

で持続した。

同時に彼は、コテュス（トラキア王、後述）への伺候をしていたはずである。なぜなら彼の息子のメネステウスがコテュスの娘と結婚しているからである。この婚礼は、おそらく遅くとも387年であろうと考えられる。イフィクラテスの子のメネステウスは356/5年にストラテゴス〔將軍〕位に就いているが、30歳にならなければこの役職は勤められないためである。したがってメネステウスはおそらく386/385年には生まれていたであろう。これはアンタルキダスの和約とほぼ同時期ということになる。

4. メネステウス

REに載るカールシュテットの記事によれば、メネステウスはイフィクラテスの子で、ラムノスの出身である。彼の母はコテュス王の娘であり（ネポス、イフィクラテス伝3,4）、メネステウスの主たる天賦の才は、父におけると同様、軍人としてのそれであった（プルタルコス、フォキオン伝7）。個々の指揮のうち、われわれは356年・同盟市戦役におけるそれを知っている。ここでメネステウスとその父イフィクラテスは、メネステウスの義父ティモテオスとともに、主戦派カレスの主張に抗して出陣を拒み、それ故にエウテュナイ（將軍たちの任期が切れる際、その行動をめぐって行われる公的審査）において告訴された。だが、ティモテオスを除き、彼らは放免された（ネポス3,2；イソクラテス15,129）。以降もメネステウスは三段櫓船指揮官として、対スキアトスの行軍に参加したほか（334年以前）、ヘレスポントスへの出征に参加した。これはマケドニア軍がアテナイ艦隊を拘留した際のことである（336年、偽デモステネス17,20；すでにこのとき、フィリッポスは没している）。メネステウスはしばしば三段櫓船指揮官になったが、これは40年代、30年代についてあてはまるもので、それ以前については必ずしも該当しない。メネステウスはおそらく325年に没したものと思われる。

こうしてメネステウスの後半生には、すでにフィリッポスばかりでなくアレクサンドロスの姿もうかがわれることになる。

5. ティモテオスの子のコノン

先のティモテオスをめぐっては、アポドロロスによるティモテオス弾劾の弁が、デモステネスによって記され、遺されている（デモステネス第49番弁論『ティモテオス弾劾』；Murray 1939）。そして、このティモテオスの実子は、祖父の名と同じコノンという名であったことが知られている（デモステネス第40番弁論『ボイオトゥス弾劾II』39）。

ティモテオスの子のコノンについては、父ティモテオスの死後（354年）、民会が、コノンは10タラントンをアテナイの市壁の改修のために用いるべきであると決議し、これをもってティモテオスに課せられた100タラントンについては、償いが済んだと見なされた（ネポス、ティモテオス伝4,1）。コノンはこうして、父の持っていた巨額の財産を所有したままでいることができた。だがコノンは、政治的役割を果たそうという野心を、自らの先祖から受け継ぐことはなかった。その代わりにコノンは、種々の社会的な働きに招かれ、それを以て、自らの祖国において名

望ある地位を獲得した。偽デモステネスの第40弁論『ポイオトゥス弾劾Ⅱ』39節では、ポイオトゥスが母の嫁資をめぐり、マンティテオスに対して起こした訴訟において、コノンが任意の調停者として推薦されている。もっともマンティテオスはこれを拒否している。

6. コテュス（トラキア王在位382-358）

自らの娘をイフィクラテスに嫁がせたとされるコテュスについても見ておこう。コテュスはセウテスの子で、セウテスは前4世紀の初頭に、オドリュサの支配者の下位の王としてプロポンティスを支配していた。コテュスはこの父に従い、383年ごろ、ヘブリュテルミスの後継者として、全支配地域を掌握した。彼が24年間にわたって支配したという、辞典『ハルボクラティオン』の記載は、この全支配地域を統治した期間なのであろう。なぜなら上掲のように、コテュスは自らの娘をイフィクラテスに嫁がせ、この二人の間にメネステウスが誕生しているが、このメネステウスが将軍になったのが356/5年であり、婚礼の時期はそれから計算すると383/2年よりも数年さかのぼるからである。つまり387年には、コテュスはすでに「王」であったと思われる。

コテュスは前382年から358年までトラキア王の位にあったが、彼については、偽プルタルコス『諸王および諸帝の警句集』の174にも挙げられている。

7. ケルソブレプテス

コテュスの子で、358年（ごろ）から341年までトラキア王の位にあったケルソブレプテスは、ディオドロスの第16巻に2度登場する（16,34,4；16,71,1-2）。最初は、フィリッポスに脅威を感じたケルソブレプテスが、カルディアを除くケロネソスの諸都市をアテナイに委ねると申し出、アテナイがこれに応じて植民者を遣わしたとの記事である。もっともこの企ては、直ちにフィリッポスの勤づくところとなった（353/2）。二度目はフィリッポスが343年、彼を破った際の記事である。彼はおそらく340年にはまだ生存していたものと思われる。

こうしてコテュスの子ケルソブレプテスの代には、すでにフィリッポスの姿が見え隠れすることになる。

8. カレス

ポリュアイノス『戦術書』3,9,29によれば（戸部1991）、「イフィクラテスは裏切りの廉を逃れたが、アリストフォンとカレスが訴追していた。その理由とは、エンバタにおいて、敵方を拿捕することできたのに、海戦を行わなかったというものである。陪審員席が自らには不利な判決に傾いているのを目にすると、イフィクラテスは弁論を止め、陪審員団に剣をちらつかせた。そこで陪審員団は、仲間たちをすべて武装させて陪審員団を取り囲んでいるのかと恐れをなし、全員一致でイフィクラテスに対して釈放に投票した。勝利のあと、ある人が「どうやって陪審員団の判決を逸らせたのか」と言う。「アテナイ人のためには、わたしは喜んで将軍を務めるだろうが、自分のためならば、わたしはアテナイ人に対してもう将軍ではない」と言った」とある。

カレスについては、すでにその行動をめぐり、上掲の何人かの将軍に関連して取り上げるこ

になったが、彼は357/6年、将軍の一人に任じられている。自ら集めた傭兵隊を伴い、彼は誓約を終えると「全権将軍」としてケルソネソスに向かった。この地は、ケルソブレプテス（上掲、ディオドロス16,34,4）から彼が譲渡されたものである。おそらくカレスは、その後まもなく引き続いて起こるフィリッポスによるアンフィポリス制圧（357）の後も、このアンフィポリスに出征するという命令に従ったことであろうが、同盟市戦役の勃発に伴い、それは妨げられた。カレスは357年の秋、キオスで戦ったがこれは失敗に終わった（ディオドロス16,7,3）。356/5年には再びストラテゴス（将軍）の地位にあったが、彼はヘカトンバイオンの月の11日に締結されたアテナイとトラキア、イリュリア、パイオンの領主たちとの盟約において、この役務に任じられた（ディオドロス16,22,3）。他の将軍、すなわちイフィクラテス、メネステウス、ティモテオスと一致して、カレスは包囲されたサモスの救援を行った（ディオドロス16,21,1）。356年の夏の終わり、他の将軍たちの拒絶にもかかわらず、自らはこのサモスでの海戦に参加したいと望み、エンバタにおいて単独で敵勢艦隊との海戦に臨んだがこれに敗れ、この敗戦の責任を後日、協働将軍たちを負わせた（ディオドロス16,21,4；これは354年のことかと推察される）。

カレスは今や、単独の最高司令官として、自らの兵隊に給金を支払うために、ペルシア王から離反したサトラップ・アルタバゾスに接近した（後述）。そしてペルシア王の部隊を一つの戦闘において打ち破った。この功績により、カレスはアルタバゾスより、夥しい額の報奨金を受け取った（ディオドロス16,22,1）。

われわれとしては、カレスについて、すでにディオドロスが第15巻95において「カレスが、多くの悪事を為す」と記しており（上掲）、このカレスの本性を見抜いていたかのような筆致を遺していることを想起できよう。一方、このようにペルシア王に抗する反逆サトラップ（総督）のアルタバゾスと組むカレスにはペルシア王も業を煮やし、「ペルシア王は、アテナイから離反した同盟市を300隻の艦隊で支援するつもりだ」との威嚇を公にする。こうしてカレスの行動ゆえに、ペルシア王よりアテナイにもたらされた苦情のため、また先のエンバタにおける敗戦のために、同盟市戦役は355年に終結した。これはディオドロス・シクルスの16,22,2に載る。このとき、カレスはアルタバゾスとはすでに別れていたであろう、とするのはディオドロス16,34,1である（ἐκείνου ἀπέλθοντος）。354年、カレスはアテナイにいるのが確認されよう。カレスはアゼニアのアリストフォンと共同で、協働将軍であったティモテオス、イフィクラテス、メネステウスを告訴する。

おそらく、カレスによる協働将軍たちに対する告訴と、アルタバゾスと結んで自らの指揮下の兵たちに対する給金を工面しようとする彼の行動とは、確かに後者が先行するように思われる。したがってペルシア王の威嚇に伴う同盟市戦役の終結が355年、カレスによる協働将軍たちの告訴が354年、とするのが正しいのであろう。このときフィリッポスは、すでに着々とギリシア中部への足掛かりを模索しつつ、作戦を展開していたのであった。

こうして、ディオドロスの第15巻の残部から16巻に移行する中で登場するのがカレスであり、アルタバゾスなのである。

9. アルタバゾス

アルタバゾスという名はペルシアのサトラップの名として知られ、歴史上二人が知られるが、われわれがここで取り上げるのは、総督を362年から352年まで勤めたとされるアルタバゾスである。彼はおそらく388年に、ファルナバゾスII世と、アルタクセルクセスII世の娘のアパマの間に生まれたものと思われ、まず、アルタクセルクセスII世ムネモン（在404-359）の將軍として、反乱將軍ダタメス（ネ波斯、ダタメス伝参照）掃討のために登場している。ダタメス死去（362）の後、ダスキュレイオンの総督職を引き継ぐ。その後まもなく、彼は自らのおじであるオロンテスとともに蜂起するが、間もなく恭順の意を示す（360年頃）。だがアルタクセルクセスIII世オコス（在359-338）が王位を継ぐや否や、おそらくは先頃の蜂起に対して大王が企図した処罰を免れるために、再度356年頃謀反を起こす。

この際アルタバゾスは、上述したようにアテナイの將軍カレスとその傭兵隊を獲得することに成功し、その援助を得て勝利を収める（ディオドロス16,22,1）。カレスが大王による威嚇のために、アテナイ当局から召喚されるや、アルタバゾスはテバイの支援を取り付け、テバイは353年、5000人の兵を率いたパンメネスを彼の許に送った（ディオドロス16,34,1-2）。だが戦争の長期化ゆえ、テバイの援助が不確実であったため、352年にアルタバゾスは大王の將軍の攻撃の許に届し、マケドニア王フィリッポスの宮廷に身を寄せている（ディオドロス16,52,3）。彼は当地に留まり、アルタクセルクセスIII世（オコス）を、アテナイ勢（353）またテバイ勢（349）の加勢により破っている。こうして彼は345年頃、自らの義兄弟であるロドス島のメントルが帰還の許可を取り付けてくれるまで機会をうかがう。一説（大牟田2001：451）では325年頃に殺害されている。

XII. 結. 前4世紀の特質

本稿の後半部で取り上げたアテナイの將軍カレスや、ペルシアの反逆サトラップ・アルタバゾスの姿は、コノンやティモテオスといった由緒ある家系に属す有徳の將軍たちの姿とは異なり、いかにも策に長けた暗躍家たちのあり方を想起させる。歴史的に見れば、同盟市戦役の頃（前357-355）は、フィリッポスが本格的にギリシア中央部への進出を企てる時期と一致しており、カレスやアルタバゾスの活動は、フィリッポスの南下を側面から促進したということになる。しかし彼らの暗躍の背景には、すでに時代そのものが、個々人レベルの判断に基づく行動に支配されるようになってきているという変化を看取できるだろう。歴史記述に際して要請される「枠組み」としては、エパメイノンダスの死（362）によってテバイの覇権が潰えて以降、フィリッポスの到来を後から意義づける以外には、目覚ましい基準は見当たらないとも言える。すでに、大きな歴史的流れの下に時代を捉え出すには、それに相応しい枠組みが見出せなくなっていたのであろう。

こうして時代は、前4世紀を境として、戦争をはじめとする出来事を枠組みに「歴史」そのものが記述される時期を終え、個々人の偉業や逸話に焦点を当てつつ記述される「伝記」の時期へと移行してゆくのである。

参考文献

- 合阪 學 1998 『ポンペイウス・トログス 地中海世界史』 京都大学学術出版会。
- 秋山 学 2010 『ハンガリーのギリシア・カトリック教会』 創文社。
- 伊藤貞夫 2004 『古代ギリシアの歴史』 講談社学術文庫, 講談社。
- 大牟田章 2001 『アイリアノス アレクサンドロス大王東征記』 (上・下) 岩波文庫, 岩波書店。
- 久保正彰 1975 「ソクラテースからアゲーシラーオスまで—伝記作者クセノフォンについて—」 秀村 欣二・久保正彰・荒井献編 『古典古代における伝承と伝記』 131-159頁, 岩波書店。
- 小池澄夫 2002 『イソクラテス 弁論集』 (1, 2) 京都大学学術出版会。
- 戸部順一 1991 『ポリュアイノス 戦術書』 国文社。
- 根本英世 1999 『クセノポン ギリシア史』 (1, 2) 京都大学学術出版会。
- 廣川洋一 2005 『イソクラテスの修辞学校』 講談社学術文庫, 講談社。
- 森谷公俊 2016 『アレクサンドロスの征服と神話』 講談社学術文庫, 講談社。
- Brownson, Carleton L. 1918 *Hellenica. Bks 1-4* (LCL 88). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- 1921 *Hellenica. Bks 5-7* (LCL 89). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Burt, John O. 1980 *Minor Attic Orators II*. (LCL 395). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Hammond, Nicholas G.L. 1986 *A History of Greece to 322 B.C.*. Oxford, Clarendon Press.
- Murray, Augustus T. 1939 *Demosthenes V*. (LCL 346). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Norlin, George 1982 *Isocrates II*. (LCL 229). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Oldfather, Charles H. 1954 *Diodorus Siculus: Library of History. Bks XIV-XV.19* (LCL 399). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Sherman, Charles L. 1952 *Diodorus Siculus: Library of History. Bks XV.20-XVI.65* (LCL 389). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Underhill, George E. 1906 *Xenophon: Hellenica*. Oxford, Clarendon Press.
- Vogel, Friedrich 1985-1991 *Diodorus: Bibliotheca historica*. Stuttgart, Teubner.
- Welles, C. Bradford 1963 *Diodorus Siculus: Library of History. Bks XVI.66-XVII* (LCL 422). Cambridge Mass., Harvard University Press.
- Wissowa, Georg 1921 *Paulys Realencyclopaedie der classischen Altertumswissenschaft*. Stuttgart, J. B. Metzlersche.